がなくてはならない. (金井弘夫)

□清水敏一(編):**小泉秀雄植物図集** 251 pp. 1995. 小泉秀雄植物図集刊行会. ¥7,000(送料不要).

小泉秀雄先生の遺品の中に，多数の植物図があることがわかり，このたび没後50年を記念して，故人の職場であった共立女子薬専の関係者等の協力により刊行された．編者は登山家で，大雪山に「小泉岳」と呼ばれるピークがあることから，山名の由来をたずねて小泉先生にゆき当たったとのことで,「大雪山わが山小泉秀雄(1982)，同続編(1984)」の著作がある．今回の出版は，清水氏の努力によるところが大きい．また刊行会代表の矢武三知氏は先生の教え子である．

小泉秀雄先生の詳細な図は夙に知られているが，本書の図はそれに輪をかけている．どれもがB5版に4枚(ときに3枚)の図を配置し，部分図までも切り貼りの跡が全くない描き下ろしである．シダや裸子植物もあるが，イネ科，スゲ属，タンポポ属が最も多い．先生は遠大な計画のもとに，図鑑の制作を意図しておられたのだろう．それにしても，仕上がり寸法の図を，融通のきかせようもない頁単位に作って行くというおそろしい計画である．金井は原図のコピーを見せられたとき，ゲラ刷りではないかと疑ったものだが，先生の講義を受けた水島によって，直筆の図であることが確かめられた．ただ，植物名など僅かなメモが付記されているだけで，図の説明はなく，種類も限られているので，散逸しないようにと記念出版にしたものである．130頁にわたる図のほか，植物名目録，著作論文一覧，略年譜があり，アルバムと関係者の回想記がついている．スプリッターとして知られる小泉秀雄先生の見解，詳細な観察眼と描画力を知る上で有用な資料である．この点からすると植物名目録は，検索を目的としたものが望ましかった．また原図の植物名のメモの読み誤りが散見されるが，これは近く正誤表をつけるとのことである．本年6月に刊行されたが，先生の命日に合わせて出版日付は1995年1月18日となっている．

小泉秀雄先生は京都大学名誉教授小泉源一氏の実弟だが，家庭の事情で兄は大学へ進み，弟は農林高校を中退せざるを得なかった．独学と検定によって教員免許を得，のち共立女子薬学専門学校教授となられたが，1945年胃癌のため亡くなられた．この間，1911-1920年を北海道各地で，1920-1933年を松本ですごし，寒地植物の詳細な観察による膨大な資料を蓄積された．ことにタンポポ属，オトギリソウ属に関心をもたれ，新種の記載をされた．標本の多くは国立科学博物館に入っている．また松本時代には横内斎氏はじめ，多くの在野の植物研究者を指導し影響を与えられた．連絡先は次のとおり．〒068 岩見沢市緑が丘5-166(Tel 0126-23-4570)清水敏一．代金は後払いでよいとのことである．なお，木村敏朗氏から清水氏への私信によると，タンポポ属の図は昭和10年頃の本誌に掲載されたものだとのことである。

(水島うらら・金井弘夫)

□清水建美・梅林正芳: **日本草本植物根系図説** 262 pp. 1995. 平凡社. ¥15,000.

双子葉類・単子葉類の212種について，根の形態を詳しく図説したものである．従来見過ごされがちであった地下部の形態を，克明に観察し記録したものである．根気のいる大変な仕事である．根は水分や栄養の吸収，また一部のものでは翌年の生活のための貯蔵器官でもあり，植物の生活の一部を担う重要な器官である．ひとつの属や近縁の属での根の違いは，それぞれの種類の生活の反映であり，進化の道筋を示しているものでもある．こうした観点から根の形態をたどると，面白い結果がでてくるのではないかと考えられる．ここに載せられたのはごく一部の種類でしかないが，ここでの観察のしかたを基礎にして今後の発展が期待される．

本書は見事な図が大部分を占めているので，図鑑として見られがちであるが，最初の30頁に渡って根系の解説がある．地下茎も含めた根系の定義にしたがって，どのような形の根系があるか，根系を構成する各部分はどのように呼ばれるかなどの詳しい解説がある．根や地下茎についてこれだけの詳細な説明は，今までの教科書には見られない．また巻末に根系の分類の仕方が事細かに載せ